書き抜き読書ノート 318	2009 年 8 月 12 日

ルネ・デカルト著 「方法叙説 」白水 U ブックス、白水社 2005 年 6 月 20 日刊を読む

１．どんなふうに私が自分の理性を(正しく)導こうとつとめてきたかを見せる。
(P12)

２．私は、他人のだれのことでも私をもとにして自由に判断することにし、またどんな説教でも以前に期待させられていたとおりのものはこの世に一つもないと勝手に考えることにした。
(P13 〜 14)

３．往々にして部品をいくつも寄せ集めて作り、しかもあちこちの親方の手でばらばらに作られた細工物には、ひとりで苦心して仕上げたほどの完成が見られない。<建築家>がひとりで建築を請け負ってやりあげた建物は、何人もかかって、もともと別の目的で建てられていた古い壁を役立てながら、やりくりして模様替えした建物よりも美しくて整っているのがつねです。 (P22)

４．私が考えたのは、何かほかの方法でこれら 3 つの学問(論理学、幾何学解析と代数学)の長所を含みながら、その欠点を免れたようなものを探さなければならないということでした。国家は法律の数がやたら多いと、ともすれば悪徳に口実を与えがちになり、そうすると国家は法律がごくわずかしかなくて、それが水も漏らさずきちんと守られているときのほうが、よく治まっていることになるように、それと同じに論理学もやたら準則が集まってできているのをやめて、その代りに、私は次の 4 つの準則だけでじゅうぶんだろうと信じました。ただし、いちどでも守るのを欠かさないようにしっかりと、変わらない決意を固めたうえでのことです。

(１)第 1 の準則は、どんなことでも、ほんものだとはっきり認識しないうちはけっしてほんものとして受け取らないことです。それはつまり、速断と先入観とを念には念を入れて避けること。そして、私の判断に取り込むのは、ただ、明らかに紛れなく私の精神に立ち現れて、疑いをかけるきっかけを 1 つもつかめないようなものだけにして、それ以上は含めないということです。

(２)第 2 は、どんな難しい問題を調べるにしても、その問題を 1 つ 1 つ、できるだけたくさんの、しかも問題をいっそう解くために必要とされるだけの小さな部分に区切ること。

(３)第 3 は、私の考えを順を追って導いていくこと。いちばん単純でいちばん楽に認識できる対象から始めて、少しずつ階段をあがるように昇っていって、とうとう対象のうちでいちばん複雑な要素からなるものを認識するまで、順を追っていき、そればかりでなく、もともと自然のままではどちらが先かおたがいに後先つかない対象どおしのあいだにも順序を想定しながら、そうするのです。

(４)そして最後は、どこででも一つ残らず数え上げ、満遍なく見直しをした上で、何も手落ちがないと安心できるようにすること。

［コメント］

夏休みの読書には古典が一番ふさわしい。古典の中の古典といえばデカルトの「方法叙説」がその一つかも知れない。ゴチック様式の建築、パイプオルガンのためのバッハの作品のような精緻な論理構成の背景には豊かな人間性が感じられる作品。昔読んだことのある方は、再読を。読んだことのない方には、ゆっくりと御一読をお勧めしたい。

－ 2009 年 8 月 12 日林明夫記－